

## 第 105 回助産師国家試験分析報告

第 105 回助産師国家試験について、公益社団法人全国助産師教育協議会の立場から「助産師免許付与のために必要な能力」が測定できる出題か否かを分析した。

分析に当たっては、各設問の出題内容をタキソノミー分類および助産師国家試験出題基準目標別に分類した。

具体的には以下の 3 点を検討した。

- I. 設問と解答肢の検討
- II. タキソノミー分類および助産師国家試験出題基準からみた出題内容のバランス
- III. 助産師免許付与に必要な能力（レベル）を測定する問題か否か

本分析結果が、第 105 回助産師国家試験において当該年度の助産師免許付与のための採点や合格基準の検討資料として活かされることを切に希望するものである。

分析結果を以下に示す。

### I. 設問と解答肢の検討

設問と解答肢の検討については、午後問題 5 を不適切問題と判断した。詳細については「出題問題の検討」（表 1）を参照されたい。

全体的に、解答に必要な情報が適切に記述され、出題の意図が明確で基本的知識を問う問題が多かった。その一方で、助産の専門的知識がなくても解答できる問題、必要な情報が不足している状況設定問題、意図が不明瞭な問題、明らかに誤りと思われる選択肢（ナンセンス肢）を複数含む問題もみられた。

問題形式はこれまでに比べ四肢択一形式が減少し、五肢択一形式が増加していた。選択肢の総数は昨年（第 104 回）の 125 肢から 3 肢増加し 128 肢であった。また、視覚素材を用いた問題は 4 問（第 104 回 3 問）と増加していた。

### II. 出題内容のバランス

出題内容のバランスについては「出題基準別にみた出題テーマ」（表 2）、および「出題基準目標別の問題数（選択肢数）と割合」（表 3）、「出題基準（小項目）別にみた出題数（選択肢数）と割合」（表 4）を参照されたい。知識の想起・推定によって解答できる問題（タキソノミー I・I' 型）が 57.1%と昨年（第 104 回）の 55.2%より 1.9 ポイント増加し、複数の知識を統合して問題解決する能力をみる問題（タキソノミー II・III 型）は 43.0%と昨年（第 104 回 44.8%）より 1.8 ポイント減少していた。

助産師国家試験出題基準目標は、以下の 4 群 24 項目に分類される。

#### **【基礎助産学】**

1. 助産の基本となる概念と変遷、基本姿勢について基本的な理解を問う。
2. 女性の健康に関する支援のための基本的な理解を問う。
3. リプロダクティブ・ヘルスに関する支援のための基本的な理解を問う。
4. 妊娠による女性の変化や正常な妊娠・分娩・産褥の経過及び正常な新生児の経過や乳幼児の成長・発達における特徴について基本的な理解を問う。

#### **【助産診断・技術学】**

5. 女性や家族の健康課題の解決、健康の保持・増進に必要な相談・教育について基本的な理解を問う。

6. 女性のライフサイクル各期における相談・教育活動の実際について基本的な理解を問う。
7. 助産に必要な助産診断・技術について基本的な理解を問う。
8. 妊娠期の助産診断及び支援について基本的な理解を問う。
9. 正常な妊娠経過からの逸脱及びハイリスク状態にある妊婦への支援について基本的な理解を問う。
10. 分娩期の助産診断及び正常な経過にある産婦への支援について基本的な理解を問う。
11. 正常な分娩経過からの逸脱及びハイリスク状態にある産婦への支援について基本的な理解を問う。
12. 助産に必要な緊急時・搬送時の対応について基本的な理解を問う。
13. 産褥期の助産診断及び支援についての基本的な理解を問う。
14. 正常な産褥経過からの逸脱及びハイリスク状態にある褥婦への支援について基本的な理解を問う。
15. 妊娠期から産褥期における合併症がある妊産褥婦への支援について基本的な理解を問う。
16. 新生児期の助産診断及び支援について基本的な理解を問う。
17. 新生児の正常からの逸脱及び異常な症状・状態・疾患がある新生児と家族への支援について基本的な理解を問う。
18. 乳幼児の正常発達・発育経過を判断し、それらを促進する支援について基本的な理解を問う。
19. 乳幼児に起こる主な疾患及び支援について基本的な理解を問う。
20. 低出生体重児・早産児の特徴や疾患及び支援について基本的な理解を問う。

#### 【地域母子保健】

21. 母子保健の動向について基本的な理解を問う。
22. 母子保健活動及び助産業務を行う上で必要な母子保健行政と母子保健制度・施策について基本的な理解を問う。
23. 助産師が行う地域母子保健活動の実際について基本的な理解を問う。

#### 【助産管理】

24. 助産管理の基本、助産業務管理、助産所の管理・運営、周産期医療とその安全について基本的な理解を問う。

「出題基準目標別の問題数（選択肢数）と割合」（表 3）より、出題割合の多い順に、第 105 回は【助産診断・技術学】61.7%（第 104 回 56.8%、第 103 回 54.1%）、【基礎助産学】23.4%（第 104 回 27.2%、第 103 回 30.8%）、【助産管理】10.2%（第 104 回 7.2%、第 103 回 10.5%）、【地域母子保健】4.7%（第 104 回 8.8%、第 103 回 4.5%）となっており、【基礎助産学】および【地域母子保健】の割合が減少し、【助産診断・技術学】および【助産管理】の割合が増加していた。

またタキソノミー分類は、タキソノミーⅠ型 56 問(43.8%)（第 104 回 52 問、41.6%）、Ⅰ'型 17 問(13.3%)（第 104 回 17 問、13.6%）、Ⅱ型 23 問(18.0%)（第 104 回 32 問、25.6%）、Ⅲ型 32 問(25.0%)（第 104 回 24 問、19.2%）であった。タキソノミーⅠ型（知識の想起・推定によって解答できる問題）の割合が最も多かったことは、第 104 回と同様であったが、タキソノミーⅠ'型(0.3 ポイント減)およびⅡ型(7.6 ポイント減)の割合は減少し、Ⅲ型（複数の知識を統合して問題解決する能力をみる問題）の割合が 5.8 ポイント増加していた。

【基礎助産学】に関する問題の割合は、30 問（タキソノミーⅠ・Ⅰ'型 26 問、Ⅱ・Ⅲ型 4 問）で全体の 23.4%であった。その内訳では、周産期の正常経過等の基本理解に関する問題、女性の健康支援のための基本理解およびリプロダクティブ・ヘルス支援の基本理解に関する問題の順に多く、基本理念、基本姿勢からの出題が 2 問みられた。

【助産診断・技術学】に関する問題の割合は、79 問（タキソノミーⅠ・Ⅰ'型 33 問、Ⅱ・Ⅲ型 46 問）で全体の 61.7%であった。問題数は、時期別では分娩期、新生児期、妊娠期、乳幼児期、産褥期の順、また各時期

でみた内訳は、正常からの逸脱・ハイリスクの問題が最も多かった（乳幼児期を除く）。

〔妊娠期の診断とケアに関する問題〕の割合は3番目に多く、14問（タキソノミーⅠ・Ⅰ'型9問、Ⅱ・Ⅲ型5問）で全体の10.0%であり、第104回（16.0%）・第103回（15.1%）と比べて激減していた。そのうち、正常な妊娠経過からの逸脱及びハイリスク妊婦への支援に関する問題は10問（7.8%）であり、第104回（14問、11.2%）と同様に妊娠期の助産診断と支援に関する問題の2倍強の割合を占めていた。

〔分娩期の診断とケアに関する問題〕の割合は最も多く、21問（タキソノミーⅠ・Ⅰ'型2問、Ⅱ・Ⅲ型19問）で全体の16.5%であり、昨年（第104回）の12.0%と比べて4.5ポイント増加していた。そのうち、正常な分娩経過からの逸脱及びハイリスク産婦への支援に関する問題が12問（9.4%）（第104回5問、4.0%）と最も多く、次いで、分娩期の正常経過の助産診断と支援に関する問題が8問（6.3%）（第104回8問、6.4%）、緊急時・搬送時の対応に関する問題が1問（0.8%）（第104回2問、1.6%）となっていた。

〔産褥期の診断とケアに関する問題〕の割合は最も少なく、8問（タキソノミーⅠ・Ⅰ'型4問、Ⅱ・Ⅲ型4問）で全体の6.2%であり、第104回（9.6%）・第103回（10.5%）と比べて年々減少していた。そのうち、正常な産褥経過からの逸脱及びハイリスク産婦への支援に関する問題が4問（3.1%）（第104回8問、6.4%）と最も多く、次いで、産褥期の助産診断と支援に関する問題が3問（2.3%）（第104回8問、6.4%）、周産期の合併症への支援に関する問題が1問（0.8%）（第104回2問、1.6%）となっていた。

〔新生児期の診断とケアに関する問題〕の割合は2番目に多く、20問（タキソノミーⅠ・Ⅰ'型12問、Ⅱ・Ⅲ型8問）で全体の15.8%であり、第104回（8.0%）と比べて倍増していた。そのうち、正常な経過からの逸脱及びハイリスク新生児への支援に関する問題が11問（8.8%）（第104回8問、6.4%）と最も多く、次いで、新生児の助産診断と支援に関する問題が9問（7.0%）（第104回11問、8.8%）となっていた。

〔乳幼児期の診断とケアに関する問題〕の割合は4番目に多く、9問（タキソノミーⅠ型2問、Ⅱ・Ⅲ型7問）で全体の7%であり、昨年（第104回）の7.2%とほぼ同じ割合であった。そのうち、乳幼児の正常発達・発育の判断と支援に関する問題と、低出生体重児・早産児の特徴や疾患及び支援に関する問題は同じ割合（3.1%）を占め、乳幼児の疾患と支援に関する問題が1問（0.8%）となっていた。

【地域母子保健】に関する問題の割合は、6問（タキソノミーⅠ型・Ⅰ'型5問、Ⅱ・Ⅲ型1問）で全体の4.7%であり、昨年（第104回）の8.8%と比べて激減していた。そのうち、母子保健行政と母子保健制度・施策に関する問題が4問（3.1%）と最も多く、母子保健の動向に関する問題が2問（1.6%）となっていた。また、助産師が行う地域母子保健活動の実際に関する問題（第104回6問、4.8%）は出題されていなかった。

【助産管理】に関する問題の割合は、13問（タキソノミーⅠ・Ⅰ'型9問、Ⅱ・Ⅲ型4問）で全体の10.2%であり、昨年（第104回）の7.2%と比べて増加していた。

### Ⅲ. 助産師免許付与に必要な能力（レベル）を測定する問題か否か

「出題基準（小項目）別にみた出題数（選択肢数）と割合」（表4）、「出題基準目標別の問題数（選択肢数）と割合」（表3）より、タキソノミーⅠ・Ⅰ'型の主に知識を問うものは57.1%であり、第104回（55.2%）から1.9ポイント、第103回（53.3%）から3.8ポイント増加した。内訳をみると、タキソノミーⅠ'型の割合は昨年（第104回）より0.3ポイント減少したものの、Ⅰ型が2.2ポイント増加していた。タキソノミーⅠ型の全体に占める割合が最多であったことは、昨年（第104回）と同様であった。一方、タキソノミーⅡ型は7.6ポイント減少したが、Ⅲ型は5.8ポイント増加していた。

出題内容では、助産実践の基礎となる妊娠・分娩・産褥経過と新生児・乳幼児に関する正常および正常からの逸脱の予測と判断、異常に関する基本的な知識や支援に関する問題が出題されていた。特に、【助産診断・技術学】からの出題では、正常からの逸脱の予測と判断・ハイリスクの支援に関する出題の割合が、正常経過の助産診断と支援に関する出題の割合より上回っていた（妊娠期5.6%、分娩期3.1%、産褥期0.8%、新生児期1.8%）。また、母子保健行政と母子保健制度・施策、母子保健の動向、助産院の助産業務管理に関する問題など、今日の助産を取り巻く課題とニーズに合致した内容が出題されていた。

今回の出題問題のテーマ、タキソノミー分類別の割合の変化は、今日の助産を取り巻く状況に応じたもので

あり、助産師免許付与に必要な能力（レベル）を測定する問題として適切である。

#### 総括

1. 出題問題の検討については、1問を不適切問題と判断した。
2. 全体的に、設問には解答に必要な情報が適切に記述され、出題の意図が明確で基本的知識を問う問題が多かった。また、視覚素材を用いた問題は4問で増加していた。
3. 助産の専門的知識がなくても解答できる問題、必要な情報が不足している状況設定問題、意図が不明瞭な問題、明らかに誤りと思われる選択肢（ナンセンス肢）を複数含む問題もみられた。
4. タキソノミー分類別の出題問題の割合では、主に知識を単純想起するⅠ型の増加、記憶した事実を再表現するⅠ'型および理解・解釈を問うⅡ型の減少、問題解決能力を問うⅢ型の増加がみられた。今回も昨年（第104回）と同様にCOVID-19の臨地実習への影響を考慮し、基本的知識の確認に重点を置いた出題傾向となったと考えられる。次年度はⅠ型の減少が望まれる。
5. 妊娠期・分娩期および新生児期の正常からの逸脱、ハイリスク妊産婦・新生児の支援、分娩期および新生児期の助産診断と支援、助産業務管理、母子保健行政と母子保健制度・施策等に関する問題が多く出題されていた。また、早産児のケアや乳幼児期の親に対する育児支援に関する問題等も含まれており、新カリキュラムの教育内容に繋がる、今日の助産を取り巻く課題とニーズに合致した内容となっていた。

以上より、助産師免許付与に必要な能力（レベル）を測定する問題か否かについては、適切であると思われる。

以上